

市町村のまちづくり

# 大子町新庁舎と新しいまちづくり

## ～ 純木造による大子町新庁舎 ～

大子町役場 まちづくり課 タウンプロモーションチーム 参事 大窪 浩一郎

### はじめに

大子町では、令和元年東日本台風の甚大な被災を契機に、令和3年3月に「大子まちなかビジョン」を策定し、「防災力のあるまちづくり」、「賑わいのあるまちづくり」、「町内外との連携によるまちづくり」の3つの柱のもと、国や県の事業と連携した中心市街地周辺のまちづくりを進めています。

こうしたなか、「防災力のあるまちづくり」の大きな施策の一つとして、高台移転による新庁舎の整備が完了し、昨年9月に供用を開始しました。約60年振りとなる新庁舎は、「木の温もりを感じる新たな憩いの場」として、林業が盛んな大子町を象徴する純木造庁舎となっていますので、御紹介します。



新庁舎外観

### 新庁舎の概要

新庁舎は、町民の利用が多い行政棟と、議場のある議会ホール棟、そして倉庫棟の3棟で構成され、3棟合わせた延べ床面積は5,075㎡となっています。



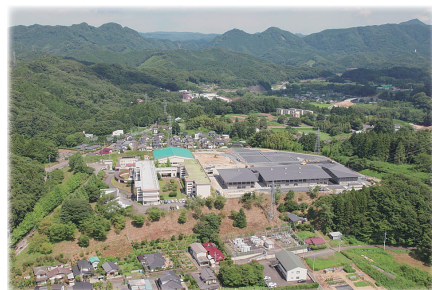
旧庁舎周辺(左端の橋の上が旧庁舎)

当初は、旧庁舎に隣接する町有地で鉄骨造として計画していましたが、令和元年東日本台風により、建設予定地を含む市街地エリアが甚大な浸水被害にあったことから、旧敷地より40m高台にある県立高校跡地(現：町営研修センター)へ移転を決定しました。併せて、県産材の利用拡大を進める茨城県の後押しと指導を踏まえ、

木造化への大きな設計変更を行いました。

木造化の変更により、整備費の増加も懸念されましたが、多くの地域産材と先導的な技術(一般製材を束ねて接着するBP材)を活用した整備事例として、茨城県や国の補助事業(サステナブル建築物等先導事業)の採択を受け、財源の確保につながりました。

また、5,000㎡を超える純木造庁舎は、全国的にも珍しく、多くの方から注目を集め、開庁後の6か月間で県内外から700名を超える皆さまの視察をいただくほか、建築雑誌等にも多数掲載いただき、大子町のプロモーションや経済効果への寄与を感じているところです。



新庁舎敷地(右側の3棟が新庁舎)

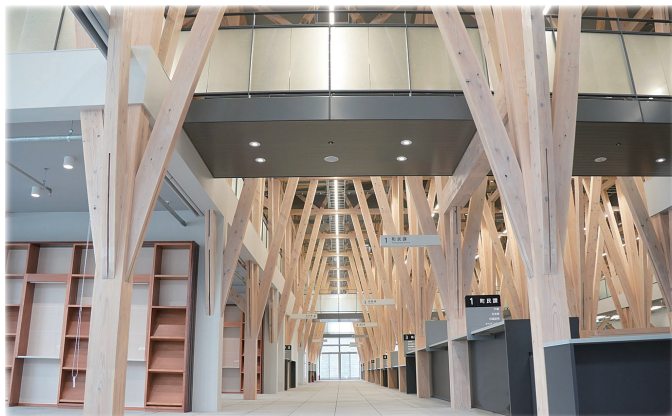
### 新庁舎の特徴

#### (1) 純木造の庁舎

大子町は、総面積(326km<sup>2</sup>)の約8割を森林が占め、良質な八溝材を生み出す林業が盛んな町です。

林業が盛んな町をアピールできるよう、構造となる木材は、すべて茨城県産材、そのうち6割は大子産材を使用しています。これらの木材はすべて合わせると約900㎡で、一般的な木造住宅(24㎡使用)にすると37棟分に相当します。

最も大きな行政棟は吹き抜けを利用した爽快な解放感



新庁舎内観



を感じることができ、2階から1階を見下ろす光景はまさに森の中に入ったような感覚を感じることができます。大きなガラス張りや天井から日差しが入り込み、来庁された方からは、「木の香りが心地よい」、「オフィスと木の絶妙なマッチングが素晴らしい」といった様々な感想をいただいています。

## (2) 防災拠点としての庁舎

新庁舎は、高台にあり地盤も安定していることから、災害に強く、防災拠点の役割を十分に発揮することができます。

有事の際には、災害対策本部の設置場所として、避難所や備蓄倉庫のある隣接の町営研修センターと連動する形で防災拠点となります。72時間の非常電源や災害時用のマンホールトイレを備えるほか、1階に配置した議場は避難所や物資の保管にも利用可能となっています。さらに、高台の庁舎と河川沿いの市街地が双方から視認できるよう建物を配置して、防災拠点としての中心性を確保するなど、様々なことを考慮した作りとなっています。

## (3) だれもが利用しやすい庁舎

今回の新庁舎整備では、基本理念の一つに「すべての人にやさしく利用しやすい庁舎」を掲げています。町民をはじめ来庁される方が、木の温もりや香りの中で、利用しやすく憩いの場となるような庁舎を目指しています。



行政棟2階ブックラウンジ

旧庁舎にはなかったエレベーターの設置などバリアフリーに対応したほか、町民ワークショップの意見を取り入れ、ふれあいホールやブックラウンジ、多目的スペースなど、住民が気軽に立ち寄り交流できるスペースを数多く配置しました。共有スペースのテーブルや椅子も木製を揃え、和やかな時間を過ごせる空間を生み出しています。

## (4) 特産品を活用した庁舎

木材以外にも町の特産品を庁舎内の装飾に取り入れ、庁舎そのものが本町の魅力を発信する建物となっています。行政棟1階の町民利用スペースに配置した本棚壁面や総合案内カウンター下部の格子部、課名表示板には特産の太子漆を塗装したほか、本棚や吹き抜け部のすりガ

ラスには、太子那須楮を原料とした美濃和紙を使用しています。

## ■これからのまちづくり

高台の新庁舎建設とともに、国や茨城県による、河川改修や中心市街地における堤防の嵩上げなど、「防災力のあるまちづくり」が目に見える形で進んでいます。町では、引き続き、国や茨城県と連携・協力しながら、次のステップとして、旧庁舎跡地への防災拠点の整備と中心市街地の活性化に取り組むこととしております。

令和3年度に、「道の駅奥久慈だいご」が、全国39カ所のひとつとして「防災道の駅」の選定を受けました。「防災道の駅」は、旧庁舎を解体後、敷地を嵩上げて整備するという大きな事業です。ヘリポートなどの広域的な防災機能を備えるほか、イベント広場などの賑わい施設の整備を計画しています。施設の一角には庁舎機能を設けることも検討しています。並行して、駅前には交流拠点施設の整備計画を進めているところです。

庁舎移転により、中心市街地の空洞化が懸念されるなか、これらの施設については、賑わい創出の大きな役割が求められています。現在、どのようなものを作ればよいかなど、町民ワークショップの意見を取りまとめながら設計を進めています。



交流拠点施設のイメージ図



町民ワークショップの様子

## ■おわりに

高台の新庁舎建設や旧庁舎跡地での防災道の駅の整備など、太子町の景色を大きく変えるような事業が進んでいます。

木造の新庁舎を契機に、地域での木材利用が一層進み、林業・木材産業の振興とともに、林業や豊富な特産品を有する太子町のPRにつながることを期待しています。

また、引き続き、国や県と協力しながら、「太子まちなかビジョン」が描く、防災力と賑わいがあり、町内外と連携した活力ある中心市街地周辺のまちづくりを進めてまいります。

